

# 機械制絹糸紡績とファッションの民衆化 1790-1930

井上直子

## 目次

- 1 はじめに
- 2 研究史
- 3 絹紡糸とは何か
- 4 「絹の民衆化」とファッションの変化
- 5 近代工業としての絹糸紡績の誕生
- 6 絹紡糸は何を作ったのか
- 7 日本への導入
- 8 絹紡糸と銘仙
- 9 おわりに

## 1 はじめに

本稿の目的は19世紀ヨーロッパにおいて機械化が進み、維新後に日本でも導入され、昭和10年頃に生産の最盛期（昭和7年には6,700トン超、同12年には462,964鍾）を迎えた絹糸紡績の意味を再考することにある<sup>(1)</sup>。しかし2003年、日本に残った最後の生産拠点、シナノケンシ社（現在の上田市で1918年創立）本社工場が生産を終了し、絹紡糸 spun silk が我々の日常生活の中で取り沙汰されることはほとんどなくなった。今、絹糸紡績業が果たした役割を振り返ることにどんな意義があるのだろうか。それは究極的な「絹の民衆化」を推し進め、日本・ヨーロッパのそれぞれにおいて「ファッション」を作ったということに他ならないと言うのが、この論考の結論である。

言うまでもなく、絹は古今東西を問わず術示的消費を象徴する<sup>(2)</sup>。絹は、繊維としての均一な細さ、織物としての薄さや手触りのよさ、ドレープに現れる光と影のコントラスト、透明感、絹鳴りの音といった特徴から、20世紀以降化学繊維が普及するまで、他の繊維には代替することのできない至高の存在であった。とすれば、18世紀以降の紡績技術の機械化によって、絹紡糸はこのラグジュアリー象徴を代替し、レーヨンへと引き継がれる「手に入るラグジュアリー」(accessible luxury) の民衆的消費を可能にしたとも言えよう。

なお「ファッション」の定義は定義を試みる者の問題意識によって大きく振れやすい<sup>(3)</sup>。本稿では社会経済史的視覚を重視し、そのサイクルの短期化、明瞭なシルエットや素材の差異化、組織的マーケティングによる大衆消費の急速な拡大などを要件として捉え、19世紀パリにおける新物商の登場にその起源を措定することとする<sup>(4)</sup>。

## 2 研究史

近代的な機械絹糸紡績の研究としては、大正から昭和初期にかけて技術解説を主体とするものがほとんどである。技術への社会的関心の高さを反映して、絹紡糸生産の最盛期である1930年代半ばまでこのような紡績技術の専門家による技術指南書の出版が続いたのだろう。一方で、このような指南書に見られるヨーロッパの歴史的な文脈についての記述に現地語の一次史料を精査した形跡のあるものは見当たらず、不正確な記述や、著者間で註釈のない記述の重複が目立つ<sup>(5)</sup>。

こうした知識に加えて、市場構造や価格変動性についての分析を行い、経済史的な意義を明らかにしようとしたてんで一線を画するのが濱崎である<sup>(6)</sup>。

絹糸紡績業最盛期において最も重要な最終商品である「銘仙」に関する研究としては、伊勢崎を始めとする機業地の織物同業組合が染めや織りについての技術史的記録を残している他、機業産地の流行に関する情報入手経路を百貨店、集散地問屋、機業家との関係から考察した山内の研究がある<sup>(7)</sup>。銘仙の縞模様とフランスのシネ織との関係という観点からは、フランスやその周辺諸国で絹織物やリボンの製織を学び、後に栃木県工業学校（現足利工業高校）初代校長となった近藤徳太郎研究<sup>(8)</sup>、また彼が工業高校に残した一次史料などが参考になるだろう。

貴重かつ面白いのは明治11年に岩倉使節団の一員として欧米を視察した久米邦武がまとめた100巻からなる『特命全権大使 米欧回覧実記』である<sup>(9)</sup>。当時の日本に絹糸紡績技術を導入する背景を知る上で、岩倉使節団メンバー（特に大久保利通）の訪問先や行動を仔細に把握ことが必要不可欠であり、本史料を元に今後更に国内外で学際的研究が広がることを期待したい。

こうした先行研究から学ぶところは大きいですが、ヨーロッパにおける絹糸紡績技術の発展経路やその社会経済史的意義について現地の一次史料を用いた研究の空白は明瞭である。この産業の意義、そして特に日本で果たした役割について理解するためには、クリエンス（スイス）から新町への技術導入に先駆けて、大久保利通が、そして三井工業部や三越関係者（中上川彦次郎、高橋義雄、日々翁助）らがヨーロッパに学び構想したものを理解することが必要不可欠であり、経済史・経営史的意義も小さくはないだろう。最後に、絹紡糸や銘仙に関わる研究全体として、川上・川下、あるいは紡績・製織・流通・販売・意匠（美術史・服飾史）研究間の断絶が明らかである。糸・織物・着物を通じた、より総体的な歴史把握が課題として残されていると言えよう。

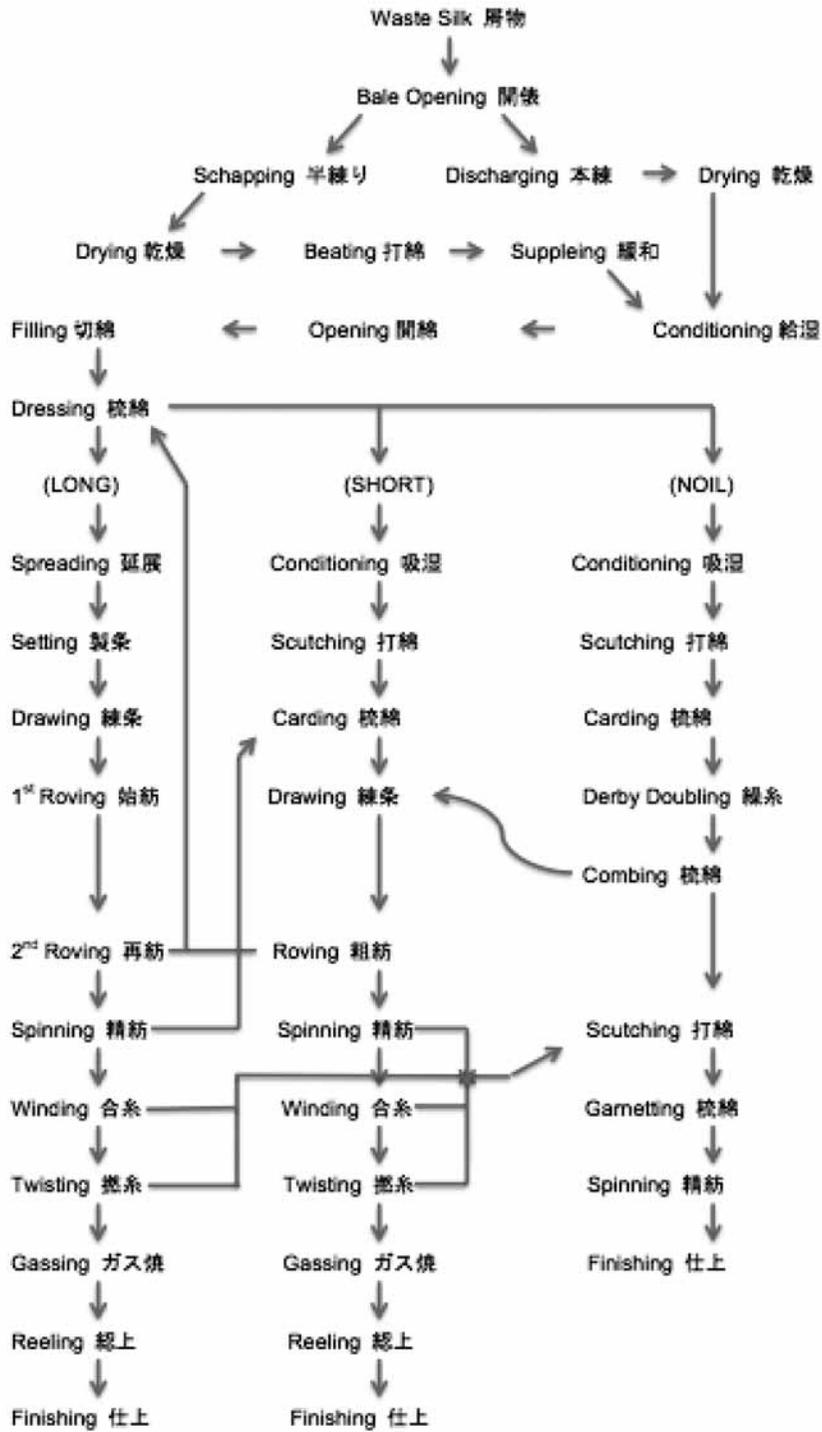
### 3 絹紡糸とは何か

一般に絹糸というと1872年に設立された富岡製糸場で行われていたような繰糸器の釜の繭から糸をとる製糸 silk throwing を連想するかもしれないが、その過程で出る屑や毛羽、玉繭<sup>(10)</sup>、出殻繭<sup>(11)</sup>、穴あき繭<sup>(12)</sup>、死籠り繭<sup>(13)</sup>、汚れ繭<sup>(14)</sup>、銹び繭（さびまゆ）<sup>(15)</sup>、あるいは宮繭の初めに吐く繭の外側部分である生皮苧（キビソ）や最後に吐く繭の内側部分の蛹襯（サナギハダ）などの原料を、方向を揃えた上で撚り合わせ引き延ばすことを絹糸紡績 silk spinning と呼ぶ<sup>(16)</sup>。機械を使わない、いわゆる手紬（てつむぎ）は絹の歴史と共に古くから行われてきた。機械化された絹糸紡績の工程（図1）については前節で紹介した先行研究のほとんど全てが言及している。敢えてそこに触れるのは、そもそも絹糸紡績への理解が低いこととは別に、それが「紡績」の技術そのものであり、木綿や羊毛などの他の天然繊維の紡績工程と同様に、製糸とは比較にならない重厚長大な設備と電力を必要とし、そのための場所を選ぶ大型の近代産業であることが理解できるからである。扁平なりボン状で天然の撚りがかかっている構造から紡績に最も適合的な天然繊維である木綿とは異なり、つるっとした引っかかりのない形状のため決して紡績向きとはいえない絹も、実際には木綿同様、紡績の機械化によって大きくその生産を拡大したのである。

図2はイギリス、フランス、スイス、イタリア、ドイツで特に19世紀半ば以降、発展した絹糸紡績業の産業集積（及び佐々木長淳の訪問先（p.61））を示す。これを見ればイギリスのブラッドフォードとドイツのクレーフェルトを除けば、ヨーロッパのシルク・カントリーであるイタリアやフランスに近く、豊富な水力が期待できるアルプス周辺で成長した産業であることが理解されるだろう。

### 4 「絹の民衆化」とファッションの変化

エリートによって排他的に消費されていた絹が、19世紀以降ブルジョワジーや一部暮らし向きの良い労働者達の生活に取り入れられていく「絹の民衆化」(democratization of silk)<sup>(17)</sup>はジョヴァンニ・フェデリコによって指摘されたが、ジョン・スタイルズによると、この現象もまた「遅くとも18世紀にはヨーロッパで見られるようになった、より軽く、柔らかく、薄く、安い布へと向かう嗜好の変化」の一部として捉えられるという。19世紀にはアンディエンヌ（インド産更紗またはそのヨーロッパ産模倣品）の流入、絹織物価格の下落などの諸要因からこうした傾向は更に助長され、その結果、絹とそれ以外の繊維の混紡、交織が広く普及した。その背景には1850から1860年代にかけてヨーロッパで大流行した微粒子病と1869年に開通したスエズ



図表 1 絹糸紡績の工程（森山二郎『絹糸紡績』, p.7 より作成）

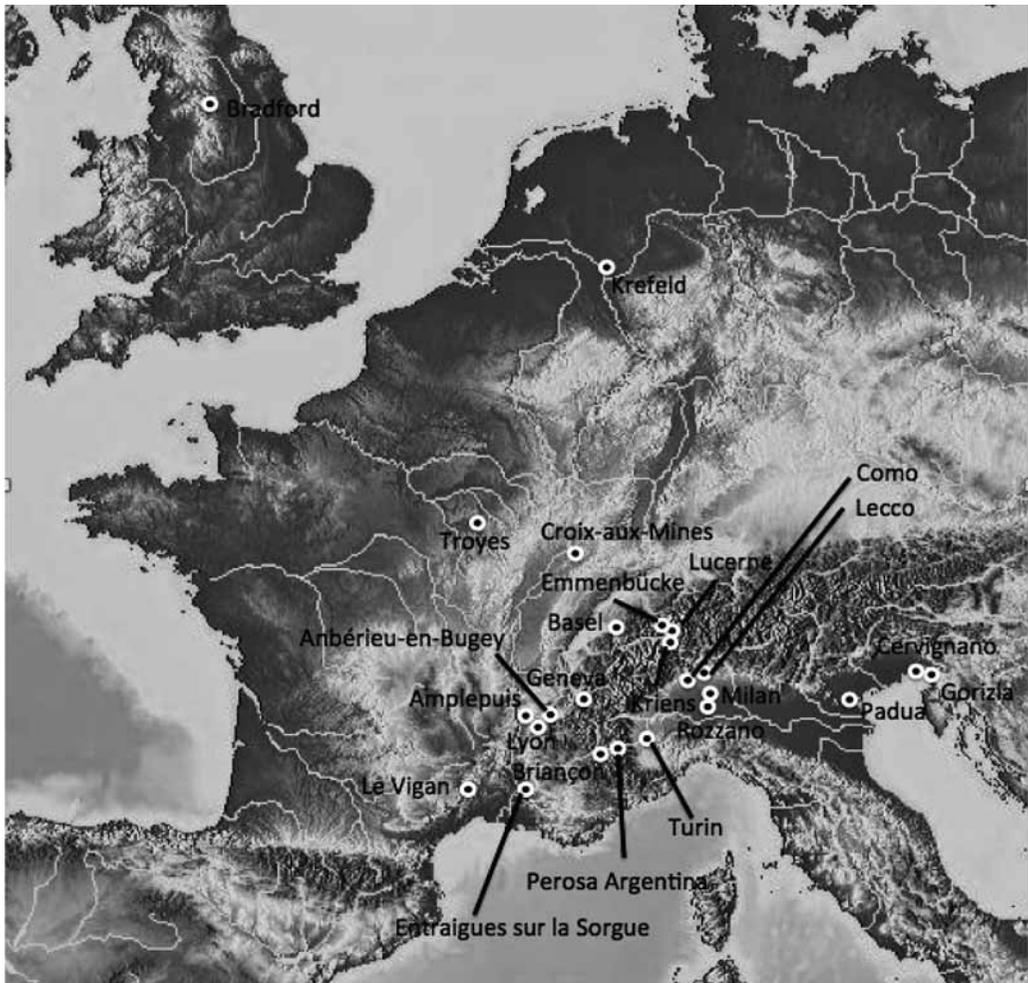


図2 19世紀アルプス周辺の絹糸紡績業及び佐々木長淳の訪問先 (p. 61)

出典) Giuseppe Gottardi, *L'industria dei Castami di seta con Particolare Riguardo all'Italia* (Tesi di Laurea), Università Commerciale Luigi Bocconi, 1932, Georges Martin, *La Schappe de Saint-Rambert*, Bourg en Bresse, 2004, F. Mangold et H. F. Sarasin, *Société Industrielle pour la Schappe*, Bâle, 1924, F. Warner, *The Silk Industry of the United Kingdom: Its Origins and Development*, London, 1921, 他。なお佐々木の訪問地(チェルヴィニャーノ Cervignano, ゴリツィア Gorizia, パドヴァ Padua, ルツェルン Lucerne, クリエンス Kriens, バーゼル Basel 等)については、佐々木長淳『蚕事探索略記』1873年, 同『埃国ゲルツ養蠶学校伝習略記』1873年, 同『伊太利・瑞西両国養蚕業調査報告書』1873年, 参照。

運河を使ったアジア・ヨーロッパ貿易の振興があった。

「絹の民衆化」が進んだもう1つの理由は絹糸紡績の機械化にあった。そもそも製糸業が発達し、その技術が向上するほどにそこから出る屑糸の量は増加する。それを原料とする絹糸紡績業にとっての好循環が成立していた訳である。絹紡糸は19世紀半ばまで生糸の半額以下であったし、1870、80年代でも最大で70%程度だった。こうした低廉さと絹が持ついくつかの性質を兼ね備えた絹紡糸への需要がファッション産業で高まり、1905年から1938年まで、フランスの絹

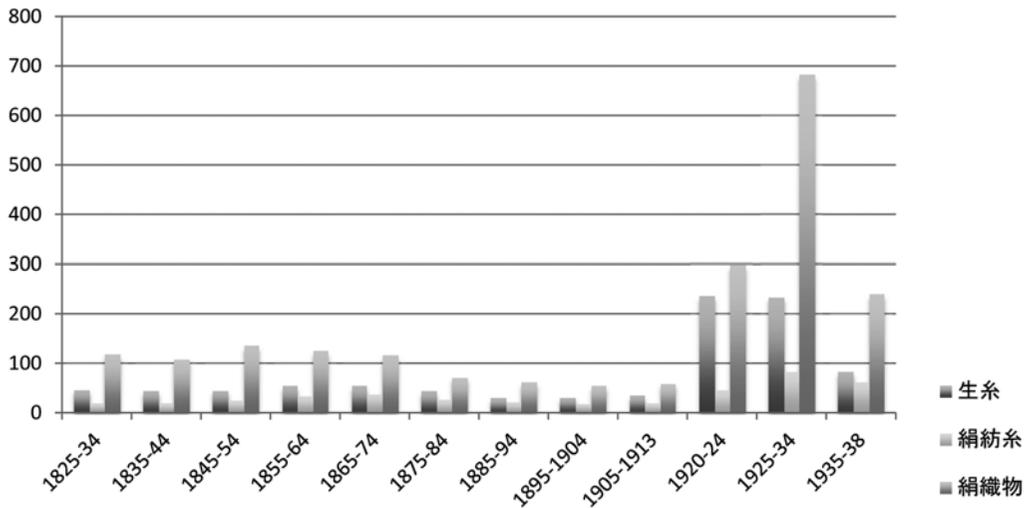


図3 フランス（1825-1938）における絹の価格（生糸，絹紡糸，絹織物）（単位：フラン/kg）

出典) Markovitch, *Industrie française de 1789 a 1964-Conclusions generales*, no. 179, p. 42.より作成。

糸生産額に占める絹紡糸生産額は90%を超えていた。図3は18世紀から19世紀初頭のフランスにおける，絹紡糸の生糸に対する価格優位性を明瞭に示している。

フランス革命以後，ファッションの中心はヴェルサイユを離れ，パリへと移動した。ここで新興ブルジョワを含む新しいマーケットを的に，産業の組織化が進むのである。例えば18世紀末にはファッション誌 *Cabinet des Modes* や *Journal des Dames et des Modes* が発刊され1868年にはパリでオートクチュールのメゾンを束ねた組合 *La Chambre Syndicale de la Confection et de la Couture pour Dames et Fillettes* が成立した。19世紀のパリで成長した新しいファッション産業は，デザイナー主導の新しいビジネスとして再編される。こうしてパリから季節ごとに発信される新しいファッション情報は，急速な通信技術の発展に支えられ，瞬く間に世界中に届けられるようになったのである。

流行の周期が短くなり多くの情報が瞬時に消費されるようになると，差別化のハードルも上がった。人より新しい流行を取り入れることに貪欲な女性は，新しい布地のみならず，目新しいシルエットを志向するようになった。ドレス，帽子，靴や傘を装飾するため，絹の輝きを持ちながらも安価なベルベット，フェイクファー（フラシ天），クレープ（縮緬），ガーゼ，レースなどが大量に求められたこの時代，その要請に応えたのが絹紡糸だったのである。

松原によれば18世紀末から19世紀半ばにかけ，3つの織物「花の大柄模様織，小柄模様織・小柄捺染，純無地織（タフタ・サテン・ファイユ）が流行の土台をなし，これらが交代する形で流行が生まれた<sup>(18)</sup>。しかしその基底では着実に「大衆化」が進み，スタイルズが指摘した通り，

18世紀末には錦織，金銀糸入り紋織，花柄絹布，刺繍物などの奢侈的織物が流行遅れとなり，軽くしなやかな織物（亜麻，モスリン，ガーゼ）や白地織物など大衆的織物へと需要が移行していったのである。さらに1876年以降になるとガーゼやクレープ，チュール，レースの他に，微粒子病による生糸価格の上昇を反映して交織（生糸，絹紡糸，羊毛，亜麻，木綿）需要が増大していく<sup>(19)</sup>。

19世紀の印刷技術の発展とともにファッション関係の雑誌や定期刊行物は更に普及した。その中に入っていたファッション・プレートと呼ばれる彩色されたファッション・イラストには服地の素材などが詳細に記されていたり，端切れが貼ってあるものもあり，当時の女性の装いの手本となったことが知られている。したがって，様々な社会層の読者を対象とするために細分化した雑誌の主要部分であるファッション・プレートからは，当時流行していたテキスタイルをふんだんに使用した中産階級以上の多様な女性の装いと共に，流行中の布地の特徴がうかがい知れるのである。

## 5 近代工業としての絹糸紡績の誕生

現在確認できる最も古い機械化された絹糸紡績工場は，1792年にランカスターから6kmほど南にあるガルゲート Galgate で設立された。興味深いことに，その8年前には，そこから南東4kmほどのドルフィンホーム Dolphinholme にアークライト紡績機を備えた世界初の梳毛紡績工場が設立されている<sup>(20)</sup>。

それは偶然ではなく，絹屑糸の紡績には，羊毛や亜麻に使われていた機械が改良を加えられた上で使用されていたのである。イングランドに絹の製糸や紡績がワロン人によって伝えられたのは16世紀に遡るが，彼らは絹や亜麻，そして羊毛を混ぜ合わせながら織物を生産することに長けており，特にノリッチでは縦糸に絹，緯糸に羊毛を使った交織，合撚糸を作っていた<sup>(21)</sup>。17世紀にはロンドンのスピタルフィールドやコヴェントリーでもユグノーによる絹やリボンの製織を始めており，原料を100%輸入に頼るイングランドの絹産業はこうして各地において緩やかに成長を遂げていった。ノリッチ生まれで梳毛職工を父にもつトーマス・ロウムが，イタリア，ピエモンテの撚糸機を輸入してダービーにイングランド初の製糸工場を設立したのは1720年代初頭であるが，そこから絹の製糸，製織，紡績が繊維産業のベースがあり豊富な水力と安い労働力に恵まれた土地へと広がっていったのである。

18世紀のランカスターに生きたウィリアム・ノーブルの遺言史料からは，彼が絹糸紡績（とおそらく製糸）を生業としていたことが読み取れる。またその遺言書に出てくる rugg という言葉は通常「粗い梳毛素材」という意味で使用されるもので，絹には使われないところから，紡毛

の職業的ベースを持っていたことがうかがい知れるのである。なおランカスターで生産された絹糸は、女性のレース製品、靴下、縫糸などに使用されていた<sup>(22)</sup>。

木綿、羊毛、亜麻、そして絹屑糸へと使用の幅を広げる紡績機械の原型がロウム兄弟によってピエモンテからもたらされた絹撚糸器にあり、これが木綿やそれ以外の繊維の紡績に供されながら産業革命が、ひいてはファッションの民衆化が引き起こされるというストーリーは、「紡績」技術がもつ「様々な繊維に適用できる (trans-fibers)」性質を際立たせ、木綿に偏った歴史認識を相対化する可能性がある<sup>(23)</sup>。

## 6 絹紡糸は何を作ったのか

ところで1816年から1882年の間に絹糸紡績のコーミングに関する特許が、フランスで36件、イギリスで12件、スイスで1件、イタリアとアメリカでそれぞれ2件取得されている<sup>(24)</sup>。イギリスから大陸ヨーロッパ、そしてアメリカ、アジアへと拡大する絹糸紡績業は一体何を生み出したのだろうか。

先述したようにヨーロッパにおける絹紡糸はベルベットやフラシ天、クレープなどの需要に応えたわけだが、中でも特に重要だったのがベルベットである。ドレープにすると現れる深い陰影や表面の柔らかさは現在も究極のラグジュアリーを体現する。ラファエロの「ユリウス2世」やブロンジーノによる「エレオノーラ・ディ・トレドとその息子」が身を包む絹のベルベットや金糸・銀糸がふんだんに使われた衣装を見れば、それらがもつ権力や富の象徴性を理解できるはずである。フランスにおいてベルベットに絹紡糸 chenille を用いた最初の人物はリヨンの絹織物職人でフランス王室やロシア皇帝などを顧客としていたフィリップ・ド・ラサル Philippe de la Salle (1723-1804) と言われるが、彼は作品であるブロード・タペストリーの色が濃い部分に絹紡糸のベルベットを使っている。これについてリヨンの織物博物館館長でもあるマクシミリアン・デュラン教授は経済的な動機以外の積極的理由は考えられないという。

このようにヨーロッパでは絹紡糸を使って、権力と富の象徴であるベルベットを安価に製織することが遅くとも18世紀以来試みられていた訳であるが、19世紀半ばにはイギリス、ブラッドフォードの実業家、サミュエル・カンリフ・リスター Samuel Cunliffe Lister が全工程の機械化に成功する。最大の難関だったのがコーマーによって本来紡績には不向きな絹繊維の向きを揃え、しっかりと絡ませながら切断されにくく繋ぐ技術の獲得であった。これに加え1878年に特許を取得したベルベット力織機は手織の12倍の生産効率を達成し、リスター社の安価なベルベットやフラシ天が市場を席卷したのである<sup>(25)</sup>。

さらに19世紀に入るとドイツでもクレーフェルト、エルバーフェルトを二大中心地として絹

織物工業が目覚ましい発展を示したのであるが、このドイツ機業の主力商品も絹紡糸を利用したベルベットであった<sup>(26)</sup>。

ベルベット生産に絹紡糸が使用されたのは、価格が一義的な理由ではあろうが、それ以外にも3枚綜統で製織可能という単純な構造や、パイルをカットしたあとの毛羽が柔らかく高密度に見える効果についても考慮すべきであろう<sup>(27)</sup>。

## 7 日本への導入

日本への絹糸紡績の導入を力強く促進したのは大蔵卿、大久保利通（明治6年11月より内務卿）であった。岩倉使節団の一員としてブラッドフォードやリヨンでその生産現場を見学していた大久保は、日本からただ同然で輸出される絹屑糸が見事に再生され、当時ヨーロッパで流行していたクリノリンやクリノレットあるいはバesslerといった、布をふんだんに使ったスタイルのドレスや、帽子や傘など装飾品のレース、カーテンやソファなどの室内装飾に利用されていることを知って驚愕した<sup>(28)</sup>。実際、使節団のメンバーは欧米の社会風俗への関心も高く、久米邦武の『米欧回覧実記』にはイギリスとフランスのファッションの相違についての言及もある。絹糸紡績によってもたらされる経済効果、人々の装いの変化（民衆化）を十分に理解した上で、その日本への導入に動き出す大久保は、日本から初めて参加する万国博覧会（明治6年ウィーン）において、事務官として準備を取りまとめた工部省官僚、佐々木長淳（ながあつ）に対し、準備が終わるや否や、オーストリア＝ハンガリー帝国内外で養蚕や製糸、絹糸紡績の近代的な技術を習得するように命じたのである。

なお佐々木はゴリツィア<sup>(29)</sup>やパドヴァといったオーストリアとイタリア王国の国境付近、さらにはスイスのルツェルン周辺などを、明治政府のお雇いドイツ人教師であったグレーフェンとともに訪問し、ある時は科学者から正式な研修を受け、ある時はスパイ行為を疑われながらも工場内部を見学し、工部省へのレポートを作成した<sup>(30)</sup>。多能だった佐々木ではあるが、渡欧して間もなくドイツ語やイタリア語圏で単独、情報収集や専門技術の習得をするのは無理がある。つまり佐々木に同行したグレーフェンが、研修から機械の発注まで、佐々木の手足となって大きな貢献をしたことが想像される。グレーフェンは絹糸紡績の産業集積が見られたクレーフェルト出身のエンジニアでもあったのである。

佐々木はゴリツィアの養蚕試験場において当時場長だったボッレと仕事を越えた友情を築き、帰国後も東京帝大初の養蚕学教授となった息子、忠次郎らをまじえた交流を続けた。明治7年にはミラノで開催された万国養蚕会議に参加するため再度渡欧もしている。またゴリツィアでの別れから20年後、今度はボッレが日本養蚕業の実地調査にやってきて忠次郎とともに国内の主要

な養蚕地、機業地を巡っている<sup>(31)</sup>。更に第1次大戦以降、今度はイタリアに編入されたゴリツィア周辺に日本から研究者が蚕業技術を教えにいったことも分かっている。養蚕や絹糸紡績の技術を介した交流がシルク・カントリーとしての両国の近代化を彩ったことを付記しておく。

長淳の献策を受け、1877年、日本にも新町に初の絹糸紡績工場が設立された。ルツェルン近隣の町、クリエンスより紡績機械を、クレーフェルトより蒸気機関と水車機関を輸入し、これを設置したドイツ人技師マルティンは、1879年東京、千住に新設された製絨所でも同じく機械の取り付けを行なっている。操業当初、原料の供給が安定しない製絨所が新町から絹紡糸を購入して補完していたという記録も残っている<sup>(32)</sup>。このように日本絹糸紡績業創成期において、新町と千住の間で人的あるいは技術的交流が続いたことは、絹糸紡績と羊毛紡績の技術的起源を考えると大変示唆深い。

ヨーロッパではベルベット需要が大きかった絹紡糸であるが、19世紀末の日本ではいかなる用途があったのだろうか。それは奇しくもベルベットと共に「絹の民衆化」を象徴するクレープ、すなわち縮緬であった。明治後半から大正前期にかけての丹後縮緬の主流は絹紡縮緬であった。また明治初頭、西陣でも友禅の近代化を模索中であり、化学染料や絹紡縮緬を取り入れていたのである。縮緬は表面の美しく贅沢なしほが特徴であるが、その組織は単純であり、製織しやすい。また重要なのは、強燃をかけてボコボコした表面が新しく生産を開始したばかりの絹紡糸の欠点を隠しやすかったということでもある。

## 8 絹紡糸と銘仙

図2でも見たように、絹紡糸の生産は19世紀半ばよりフランスを中心にアルプス周辺の国々で発展した。フランスは19世紀前半の復古王政期もほとんど国内産の絹屑糸を利用した世界最大の絹紡糸生産国であったが、1870年代後半から原料の輸入量を急増させ、初めにインド、その後中国と日本からの屑糸輸入を増やしていった。ちなみに1911年から1922年の間に原料の半分を日本から、1/3を中国から輸入し、輸入量の1/4をスイスやベルギー、ドイツ、イギリス、イタリアなどの周辺国に再輸出していたこともわかっている<sup>(33)</sup>。マルコヴィッチによると1865年から1934年の間に絹糸紡績の生産量は生糸生産量の60%から95%までを占めるようになった<sup>(34)</sup>。図4からも分かるように、フランスにおける絹糸紡績業は1910年代までは重要な輸出産業であり、20年代まではそれなりの重要性を維持したのである。

一方、1909年まで毎年イタリアとフランスから平均4.2トンの絹紡糸を輸入していた日本は、1910年、ついに輸出国へと転換を遂げることに成功した<sup>(35)</sup>。図4は1924年まで日本以上に絹紡糸を生産していたフランスが、1925年から1934年の間に日本によって追い抜かれたことを示し

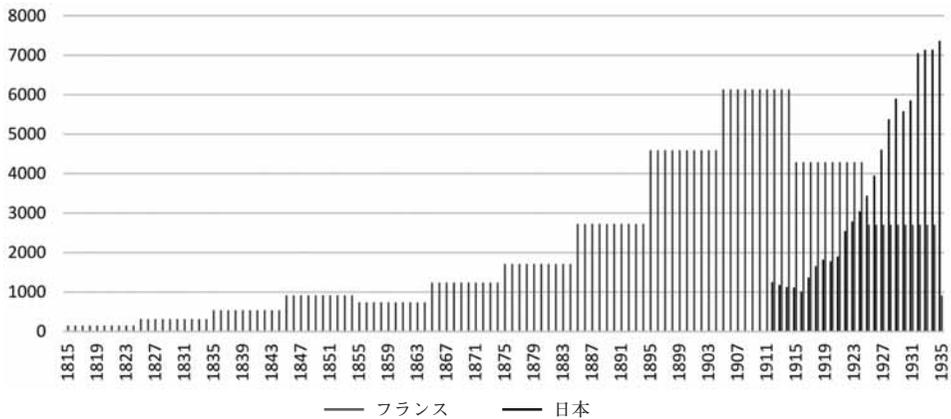


図4 日本・フランス絹紡糸生産量（1815-1935年）（単位：トン）

出典) 日本に関しては「蚕糸業要覧」農林省蚕糸局, 1929, pp. 56-59, 「蚕糸年鑑」日本中央蚕糸会, 1934, p.196.を, フランスに関しては Markovitch, *L'industrie française de 1789 à 1964-Conclusions générales*. Novembre 1966, pp. 42-43. 参照。

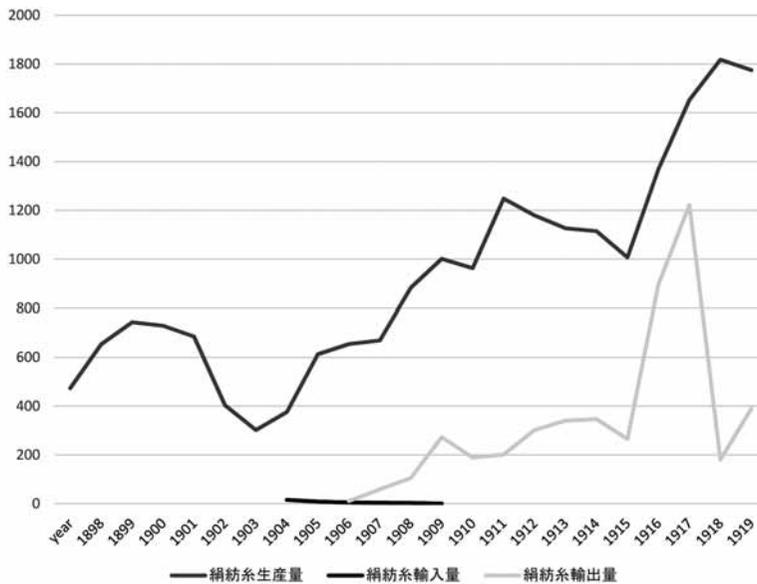


図5 日本の絹紡糸生産量と輸出入量（1898-1920年）（単位：トン）

出典) 絹紡糸生産量に関しては日本繊維産業史刊行委員会『日本繊維産業史』, 1958, p. 939, p. 942を参照。貿易量に関しては大日本蚕糸会『日本蚕糸業史』1935, pp. 196-198及び『日本繊維産業史』p. 938を参照。

ている。これについてはしかし、リヨンの絹糸紡績有限会社が1914年にはすでに絹紡糸からレーヨンへの移行を決定していたことから分かるように、絹紡糸をレーヨンで代替させる方向性が既に定まっていたからであろう<sup>(36)</sup>。レーヨンはフランス人科学者シャルドネにより絹に似せた最

初の化学繊維として開発された。それは酸の中で溶けた植物のセルロースを糸に成型したもので、絹とは組成が全く異なるが、見た目の輝きと低廉な価格が急激に人々の掴んでいったのである。

図5は、日本にとって絹糸紡績が持つ特別な意味を示している。この図によれば、日本の絹紡糸は輸出量が減っている時でも生産量を増やし続けている。これは何よりも内需の拡大を示していると同時に、絹屑糸の値上がりが輸出の妨げになっていることを示唆しているとも考えられる。

この拡大する内需をもたらしたものは何か。そしてそれが引き起こした変化がもつ社会経済的意義とはいかなるものであったのだろうか。

明治から大正へと変わる頃、生活水準の改善が見られた日本では一部のエリートのみならず、大衆ですら木綿製の着物に満足することはなかった。人々は絹紡糸を木綿と絹の間の何かと捉え、すでにそれを着用していることを知らずに、軽蔑を隠そうともしなかったという<sup>(37)</sup>。絹紡糸使用が拡大する分岐点となったのが、それを緯糸として使用する「銘仙」の大ヒットであった。

1910年代に登場し、女学生の制服として人気を集めたのが銘仙であるが、その起源は堅牢な野良着とされた太織にある。明治41年より学習院院長を務めていた乃木希典が勤勉と質素を旨に服装を規制し、実質的に銘仙以下の着物の着用を強制したことが転機となった。華族の子女が多いため華美になりがちな学生の身なりを正そうと考えた乃木の意図に反して、銘仙は急速にそのファッション性を向上させ、女学生の人気を集めたのである。例えば伊勢崎をはじめとする産地では経糸をいったん仮織りし型紙捺染後に仮織りした糸を解して本織りする解模様緋を開発し、女学生は植物などをモチーフとした派手な大緋の着物を好んで着用した。1920年代になると、模様銘仙は三越などの百貨店や織物組合、問屋などによる、婦人雑誌や百貨店の機関紙というメディアを介したマーケティング戦略によってそのイメージを刷新していった。

着物のファッション性は西洋服のようにドラスティックなシルエットの変化が望めない以上、テキスタイル（布地）のファッション性によって左右される。伝統柄の意味や形式を離れ、目を奪われるような色のコントラスト、模様、レイアウトでデザインに遊びを持たせ、変化に富ませるというファッション性。加えて、そこでそれぞれの生産地が持つ独自の先染め緋の技術、織物組合が主導した積極的な化学染料使用の振興が奏功した<sup>(38)</sup>。

1920年代半ばになると婦人雑誌にも銘仙の流行特集記事が組まれるようになり、産地ごとの違いなど詳細な情報が盛り込まれた。この銘仙人気がどれほどのものだったかといえば、1920年代に、国内織物市場の大半が停滞する中、銘仙市場だけが拡大し<sup>(39)</sup>、今和次郎の定点観測によれば、1925年に東京・銀座を歩き交う女性のうち50.5%、1928年に日本橋三越前では84%が銘仙を身につけていたという<sup>(40)</sup>。絹紡糸を使った銘仙の流行にこそ日本におけるファッションの誕生を見る所以である。

## 9 おわりに

このように、紡績という技術が持つ、様々な繊維に適用できる (trans-fibers) 性質「繊維横断性」が、生産者をして、原料をより安価なもので代替すること、そのとき最も手に入りやすい原料を組み合わせること、時に屑糸を再資源化し再利用することによって安さや軽さを実現させた。このような観点は、産業革命あるいはその前史を複合的な視点から読み直すことを可能にする。

絹紡糸という、絹でありながら生糸より安く、それでいて木綿にはない輝きを放ち、より大量生産に適合的で、スケールメリットを追求しうる「絹と木綿の中間」にある素材に注目することで、紡績技術における素材間の互換性が際立ち、「絹の民衆化」、ひいてはファッションの民衆化の本質をより深く理解しうるのではないだろうか。

ただそのためには最終的に人絹 (レーヨン)、その他の化学繊維の開発や生産技術の改良とそれによるファッションの変化までを視野に入れてしかるべきであり、それは今後の課題とする。

絹紡糸はアジア・ヨーロッパの両方で、所有者に表面的なラグジュアリーを提供する大衆消費型ファッションの成立に大きく貢献した。ヨーロッパにおいてベルベットやリボン、クレープが、日本においては銘仙が実現した「手に入るラグジュアリー accessible luxury」は、生産局面における大きな技術進化のみならず、百貨店や鉄道、(ファッション) 雑誌の普及といった諸条件に支えられながら、人々、特に女性、の意識や行動に大きな変化をもたらすのであるが、これについても稿を改めることとしたい。

(なお本研究は日本学術振興会による科研基盤研究 B 「18~20 世紀の糸・布・衣の廉価化をめぐる世界史」(平成 27~30 年度)、研究活動スタート支援「世界史の中の秩父銘仙 1873-1934: 地域と人びとの声」(平成 29・30 年度) 及び、城西大学学長所管研究費「民衆文化のデジタルアーカイブ化と多言語発信による大学・地域の価値創造」(平成 29・30 年) の助成を受けた。)

### 《注》

- (1) 濱崎實『絹糸紡績業の経済分析』明文書店, 1990, p. 56。
- (2) 日本でも律令制下において、製糸や製織は徹底した管理体制の中で行われており、身分制的衣料としての絹(養蚕・製糸・絹織)が庶民の衣服として消費されることは江戸時代中期までほとんどなかった(永原慶二『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館, 2003 年, p. 157)。
- (3) その起源や時期について統一した見解は存在しない。Anne Hollander や Jennifer Harris は 12 世紀を「神や社会秩序に逆らう」ファッションの誕生時期とするし、ジンメルは封建制後に登場するものと考え、Grant McCracken は近代的消費の起源をエリザベス期と措定し、Chandrra Mukerji は快樂主義的消費主義の起源を 15, 16 世紀頃と考える。17 世紀のフランス貴族の消費にその起源を求

める Rosalind H Williams に対し、Philippe Perrot は 12 から 19 世紀という長い期間の中で近代的消費が出現したと考える。しかし「ファッション」をヨーロッパの服飾に限定して考えると、その起源を「スタイルが連続的・加速度的に変化する現象が見られる」ようになった中世後期のブルゴーニュに見る向きが強く (Paul Post, Boucher, Von Boehn, Flugel, Laver, Braudel, Brenninkmeyer, Lipovetsky), ゾンバルトも「宮廷は近代資本主義システムの基盤」と捉えた。体にフィットする構造上の変化を重要視するとき、12 世紀におけるカッティングの変化が指摘されることもあるが、やはりこの時期の史料は少なく、やはり 14 世紀における男性ファッションのラディカルな変化 (上着の丈が短く、これにレギンスを合わせるスタイルが一般化した) を指摘する Quicherat らが説得力をもつ。

ここで特筆すべきは、19・20 世紀以前にはファッションがヨーロッパ独自の現象だったというフェルナン・ブローデルやニール・マッケンドリックの見解とは一線を画すも、アジア由来の手工業品がヨーロッパにおける消費革命を刺激したというグローバル・ヒストリーが強調する定説にファッションの文脈から挑戦するジョン・スタイルズの考えである。

スタイルズは東インド会社によるインド更紗の輸入が 1750 年以前のイギリスやヨーロッパのファッションを大転換させたことを否定し、むしろ中世末期イタリアの都市国家間でみられたような新奇性 novelty を追求する重商主義的輸入代替が近世に西ヨーロッパ全域へと広がったことを決定的に重要視する。こうしたメカニズムによって 17 世紀には毎年あるいはシーズンごとのファッションサイクルが一握りの中心都市からヨーロッパ全域へと広まり、それは原産地ではなく消費地の消費者選好が生産工程を遡って反映することを特徴とした。このイノベーションによって生じた時間的、地理的ファッションサイクルこそが現在の今日のファッションを形作っていると考えるのである。Fernand Braudel, *Civilization and Capitalism 15th-18th Century: the Structures of Everyday Life*, Berkeley, 1992, pp. 312-313; Neil McKendrick, The commercialization of fashion, in N. McKendrick et al. eds, *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England*, London, 1982, pp. 36-42, ジョン・スタイルズ「アジアの織物とヨーロッパ」(草光俊雄・眞嶋史叙編『欲望と消費の系譜』NTT 出版, 2014 年, pp. 27-60) 参照のこと。

- (4) 一方で、「ファッション」はフランス語 mode に対応する英語であるが、元来「やり方」という意味をもつ mode は 17 世紀から宮廷での礼儀作法、特にドレスコードを表す言葉となった。その主たる素材は絹とレースという排他的なかつ、フランス王国の新しいステープルに基づくラグジュアリーであったが、18 世紀に入ると消費革命を背景に新大陸やアジアから流入する半奢侈への需要が拡大。都市に住む女性が自ら稼ぎ、消費する生活スタイルが新しくこの時期に語彙として成立した女性名詞 mode = 「流行」となり、その中心はヴェルサイユからパリへ移動した。複数形の modes は「流行品」を意味するようにもなり、それを商うモード商 marchands de modes という職業が成立した。19 世紀に入ると高額商品を扱っていたモード商とは異なり、店に商品を陳列し、値札をつけ、定価制、現金即日払いで買い物の心理的負担を下げ、半奢侈を基礎とする都市のモードを実現し娯楽としてのショッピングを可能にした「新物商」が登場した。それこそが世界初の大規模小売業態として大衆消費の舞台となる百貨店の直接的な起源である。19 世紀半ばにはイギリス人、チャールズ・フレデリック・ワースがロンドンでの既製服製造と小売のやり方をパリに持ち込み、女性向け高級注文服 (オートクチュール) の製造と小売を合理化した。またポール・ボワレの登場とともに大規模な新規市場開拓が行われ、シンプルなスーツを販売するシャネルが爆発的な人気を獲得した。第二次大戦中パリが占領され、オートクチュールが停止すると、それまでパリのデザインを輸入・模倣していたアメリカで当初より大量生産を意図したシンプルなカッティングを前提とするデザインが始まり、本格的なマスマーケットの時代へ突入するのである。角田奈歩『パリの服飾品小売とモード商 — 1760-1830』悠書館, 2013 年

- (5) 松下憲三郎『屑繭の製糸』（「製糸の鑑」第7編）丸山舎，1908年／鴻巣久『絹糸紡績と屑物整理』蚕業新報社，1912年／森山二郎『絹糸紡績』丸善，1919年／同『絹糸紡績 続』丸善，1925年（森山二郎『絹糸紡績』丸善，1933年（改版）／大塚重蔵『蚕糸屑物と其精練法』明文堂，1927年）／日本紡織通信社編集局編著『本邦絹糸紡績事情』日本紡織通信社，1924年／小岩隆道『絹紡績』三省堂，1936年／小岩隆道『最新絹糸紡績学 上巻』工政会出版，1935年
- (6) 濱崎實『絹糸紡績業の経済分析』明文書房，1990年
- (7) 山内雄気「1920年代の銘仙市場の拡大と流行伝達の仕組み」、『経営史学』，44（1），3-30，2009年6月
- (8) 前澤輝政『近藤徳太郎』中央公論事業出版，2005年
- (9) 『米欧回覧実記』（1~5）岩波文庫，1978年
- (10) 2頭以上の蚕が共同で営繭したもので，通常より大きく，中央のくびれを特徴とする。2頭で作るため糸層の重なりが不規則でほぐしにくく，もつれて糸が切断されやすくなるため繰糸が困難である。また糸量も少ない。
- (11) 蛹が化蛾して繭を破って出たもの。
- (12) 蚕に蛆が寄生し，体内で蛆が成長して繭から出たもの。ぼろぼろになるため紬糸か真綿の原料とする。出殻繭より繭層が薄く，質も悪い。
- (13) 繭中で蚕が斃死したもの。
- (14) 死籠り繭から出た汚液が繭層に染み込んだもの。
- (15) 上簇中，天候が湿潤だったか室内換気不十分だったために，蚕の汚液で繭色が不良のもの。
- (16) 松下憲三郎『製糸の鑑』丸山舎，1908年（第七編 屑繭の製糸）参照。
- (17) Giovanni Federico, *An Economic History of the Silk Industry, 1830-1930*, Cambridge University Press, 1997, pp. 43-44によれば1875-77年から1927-1929年にかけて世界の生糸消費量が5.5倍に増加しており，木綿（4.2倍），羊毛（2倍）を含む他の天然繊維には見られない急激な変化を見た。無論，化学繊維，特にレーヨンの需要拡大の勢い（1896年から1925-1929年にかけて300倍）とは比べるまでもない。しかし高品質製品市場において絹は他のどんな繊維によっても代替できない特別な商品であった。絹が木綿や毛織物の市場を侵食していく現象は，まず1830年代のイギリスで見られるようになり，更に1920年代のアメリカでは「誰もが慣れ親しんだ麻や木綿の代わりに絹織物を求める」ようになったという。
- (18) 松原建彦『フランス近代絹工業史論』晃洋書房，2003年，p. 52.
- (19) *Ibid.*, pp. 88-91.
- (20) Frank Warner, *The Silk Industry of the United Kingdom. Its Origin and Development*, London, 1921, pp. 170-171.
- (21) Eric Kerridge, *Textile Manufactures in Early Modern England*, Manchester University Press, 1985, p. 67.
- (22) Janet Nelson, An Introduction Survey of the Silk Industry in Eighteenth Century Lancaster, in *Contrebis* (The official publication of Lancaster Archeological and Historical Society), vol. 10, 1982, pp. 14-26. 参照。
- (23) John Styles, *Fashion, Textiles and the Origins of the Industrial Revolution* (Paper for the Anglo-Japanese Conference of Historians, Osaka, August 2015)
- (24) Jean-Jacques Boucher, *Arts et techniques de la soie, Paris*, 1996, p. 66.
- (25) リスター・コーマーの原理については以下参照。玉川寛治「岩倉使節団が見たソルテア」、『技術と文明』18巻2号，pp. 57-58.
- (26) Peter Kriedte, *Taufgesinnte und grosses Kapital: Die niederrheinisch-bergischen Mennoniten und*

*der Aufstieg des Krefelder Seidengewerbes*, Vandenhoeck & Ruprecht, 2007

- (27) 2016年6月13日, 園部の日本天鵝絨工業(株)においてインタビューした藤本義人社長談。
- (28) 内務省史編纂委員編纂委員会『内務省史』1971年, pp. 551-552.
- (29) Giorgio Bolle, *Annuario dell'istituto bacologico sperimentale di Gorizia*, Gorizia, 1873, p. vi.
- (30) 『絹紡工業会月報』第22号, 1934年1月参照。グレーフェンについては, 小澤健志『お雇い独逸人科学教師』青史出版, pp. 169-174.
- (31) その成果をまとめたのが次の研究書である。Giovanni Bolle, *La bachicoltura nel Giappone*, Gorizia, 1898. ゴリツィアには写真なども豊富に残されており, 今後の研究の進展が期待される。
- (32) 『明治19年農商務省第6回報告千住製絨所, 明治前期産業発達史資料 別冊(17) I・II』, 明治41(1908)年
- (33) Louis Guéneau, *Lyon et le commerce de la soie*, Lyon, 1923 (Rep. ed., New York, 1973), pp. 234-35.
- (34) Markovitch, *L'industrie française de 1789 à 1964—Conclusions générales*. Novembre 1966, p. 41.
- (35) 大阪時事新報, 1919年4月29日を参照。
- (36) Lyon Soieries: Archives de la Société Anonyme de Filatures de Schappe de Lyon et de René Franc. 1912-1933. (Chomarat Ms 0492) リヨンの公文書館にプライベート・コレクションを開放している Michel Chomarat 氏の厚意により本史料の使用と内容の発表が許可された。Thanks to Mr. Chomarat who kindly leaves his private collection accessible to us all at the city archive of Lyon, we can understand the context of the decrease of the French production of spun silk after 1920s.
- (37) 大阪時事新報, 1919年4月29日。
- (38) 1856年イギリスで偶然合成された塩基性のアニリン染料が可能にしたモーヴ(赤紫)を嚆矢として以後, 次々と合成アリザリンなど, 合成インディゴが次々と開発・販売されるようになった。選択肢の広い幅や鮮やかな発色を可能にした化学染料は, 江戸末期から日本にもたらされ, 伊勢崎では明治19年に染色講習所を設置し, また秩父でも20年から絹織物組合主催の染色講習会を開くなど, 積極的な普及活動が始まった(埼玉県秩父繊維工業試験場編『秩父織物変遷史』中央公論事業出版, 1960年, p. 180)。
- (39) 山内雄気「1920年代の銘仙市場の拡大と流行伝達の仕組み」, 『経営史学』第44巻第1号, 2009年, pp. 3-30.
- (40) 藤森照信編『考現学入門』筑摩書房, 1987年(初出は1930年), p. 124.